

防災一人語り第5部「グラウンド・ゼロ」

アルト・サクセス伴奏付き（赤字の部分を演奏） 短縮版

無断転載・複写等不可

原作 「グラウンド・ゼロからの報告 世界貿易センタービルの崩壊」
リンダ・ウイリング プレンダ・バークマン 翻訳 長谷川とし子
脚色 加藤 雅 語り 三咲順子 演奏 小川高生 as

ASイントロ

2001年9月11日。ニューヨーク・シティは、秋の訪れを感じさせるさわやかな風と素晴らしい青空です。9時を過ぎ、久しぶりの休日に遅い朝食をとろうとしていると、突然、ケンタッキーから電話が

「プレнда、あなた無事なの？えっ、どうしたのって、何をのんびりしたこと言ってるの。大変よ！テレビをつけなさい、早く。世界貿易センターに飛行機が激突したのよ。」

「飛行機が激突・・・応援の隊員が必要だわ。本部庁舎に行こう！今、すぐに！」

こうして、マンハッタンのミッドタウンにある第12はしご隊長プレнда・バークマン、私の長い一日、いいえ、私の人生にとって、とても厳しい一日が始まったのです。

AS

私たちがマンハッタンに入ると全てが厚い埃に覆われていました。この時、私たちは災害現場の800メートル手前にいて、逃げ遅れた人を救助するため、世界貿易センターの階段を歩いて登るつもりだったのですが、そこで見たのは「世界貿易センタービルが無い！」という景色でした。

あの双子のビルが倒壊した直後でした。まわりの空気は、嵐の中、砂漠にいるかのよう。しかもそれはただの砂嵐ではなく、コンクリートとガラス片が全てを覆っていたのです。

私たちは歩きながら、消防士を見つけるたびに「第12はしご隊はどこ？」と聞きました。

途中、顔見知りの女性消防士を見つけました。私は彼女を抱きしめました。「ああ、生きていてくれたのね。良かった。」

私たちがウエストサイド・ハイウェイまで進むと、ミッドタウンにある私の消防署第3ポンプ隊の隊員を見つけました。

「みんなは無事？」 その日の朝から当番で、真っ先に出動した隊員に駆け寄ると「バークマン隊長、おれ達、第3ポンプ隊は助かった。はしご隊長と隊員2人は行方不明だ！」頭から真っ白、埃まみれの姿で叫びました。ポンプ隊員によると、はしご隊長と部下は、「メイデイ・メイデイ！」無線機から流れてきた助けを求める仲間の声を聞いて、世界貿易センターの中に入っていきました。内部が一体どんな状況なのかも構わず、ただ仲間とその周りにいる多くの市民を助けるために・・・。

すると 間もなくビルの上の方から大きな炎が見えたと思ったら、ビル全体から煙が噴き出てギンギン振動しはじめ、あっという間に崩れ落ちたそうです。「GO・GO・GO！」ビルの外で避難する人たちを誘導していたポンプ隊員や市民は、かろうじて助かりました。

2日目、まだ生きている人々の救出に望みをかけて、作業は全て手作業です。

私は日が暮れるまで、このグラウンド・ゼロで過ごし、消防署に戻り、深夜の一時にまた現場に戻りました。そのまま朝遅く、次の部隊と交替するまで活動を続けました。

都会の人は皆、他人に無関心。でもこの災害で、ニューヨーク市民は変わりました。これがあのニューヨーカー？信じられない。2日目の夕方、休憩のため消防署に戻る途中、もう暗くなっていました。市民がウエストサイド・ハイウェイに並んで、「サンキュー」と書いたサインボードを持って立っています。「ユー・アー・アワ・ヒーローズ」「ステイ・セーフ！」通り過ぎる私たちを励ましたり、拍手を送ってくれるのです。

「ヒーローだって？自分たちは誰も自分のことをヒーローだなんてこれっぽっちも思っちゃいないさ。市民はもちろん、仲間だって救い出せないのに・・・」心の中でつぶやきながら、私たちは黙って消防署まで歩き続けました。

最後に、9月11日に目にした光景をお話します。私たちは大量の煙と埃の雲の中にいました。すると明るい光が見えました。それは太陽だったのです。そこには崩壊した世界貿易センターをはじめ、ビルが林立していた時には見ることでできないはずの太陽の光が輝いていたのです。9月11日、ニューヨークで多くの人が命を失い、消防局でも圧倒的な数の人が亡くなった、その中でも希望があるのです。

多くの犠牲になった一般市民と、その何倍もの大勢の命を救って亡くなっていった消防隊員のためにも、私たちは太陽のぬくもりを背中に受けて前に歩いていかなくてはならないのです。それがどんなに長い道のりであろうとも・・・

AS エンディング

無断転載・複写等不可